

北海道立体育センター



所在地—札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1

構造・規模—RC造・SRC造・S造
地下1階、地上2階建
33,094.80m²

完成年月日—平成11年12月21日

基本設計—久米・アトリエブंक・中原 JV

建築実施設計—久米・アトリエブंक・中原 JV

設備実施設計—久米・大洋・塚田 JV

外構実施設計—パブリックコンサルタント(株)



設計の考え方

体育センターの敷地は、緑豊かな豊平公園（旧農林水産省林業試験場）に隣接し、住宅地に囲まれている。計画に当たっては『森と一体となった周辺環境にやさしいスポーツの殿堂』をコンセプトとして、環境と調和し、市街地内に残された貴重な緑のオープンスペースを生かし、新たな都市景観の創造と近隣の生活を阻害しない施設配置を心がけた。

スポーツや豊かな自然を、市民交流の機会ととらえ、屋内外のパブリックスペースを豊かに構成・デザインし、自然と呼応し一体化した親しみやすく魅力的な場を、最新の技術と時代の感性によって創成することを目標とした。

高さを低くおさえ、3棟に分節した威圧感のない建物を敷地中央に埋め込み、南側を一般利用者のエントランス及び、水と緑により演出された広場とし、北側を管理者・選手のエントランスと専用駐車場に明確に分離した。

スポーツ関連フロアを主階である地下1階に集約し、それぞれが独立した利用と大会時などの一体利用を図ることにより、様々な運用形態を可能とした。

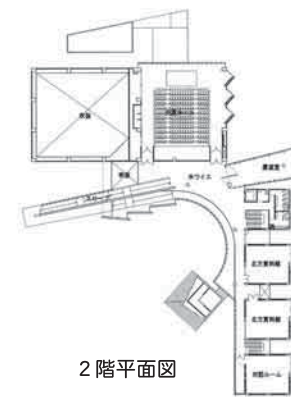
メインアリーナは、公式競技はもとより各種イベントにも対応可能な性能を備え、スポーツ競技に最適な床弾性と、イベントなどの極大な荷重条件をともに満足する高強度床下地システムを採用、ロールバックスタンド席は多様な客席配置が可能なエアークッション移動式を採用した。

南面した明るくゆったりとした段状のロビー「屋根のある広場」を設け、道民が気軽に利用できる憩いと出会いの場として設定した。また、公園の緑の面しペアガラスのDPGガラススクリーンを用い、開放性と透明感のある空間を実現した。

北海道立北方四島交流センター(ニ・ホ・ロ)



所在地 — 根室市穂香110番9
構造・規模 — RC造2階建 2754.70m²
完成年月日 — 平成11年11月10日
基本設計 — (株)北海道岡田新一設計事務所
実施設計 — 道岡田新一・環境設備JV
外構実施設計 — チカラ総合設計(株)



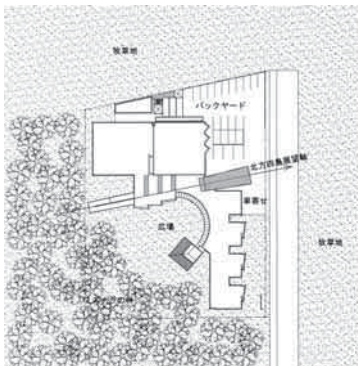


設計の考え方

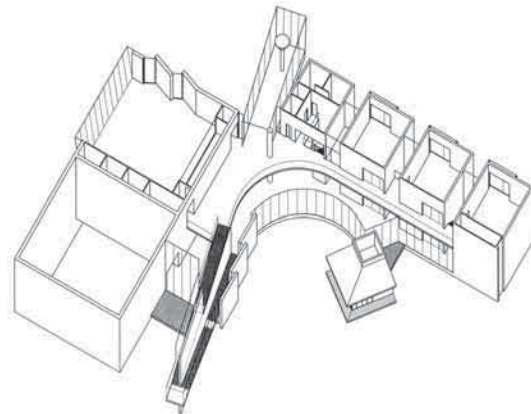
北方四島交流センターは、北方四島居住者がビザ無し交流での来日時に地域住民と相互理解を深めるために計画され日常は地域の人たちのコミュニティーセンター、さらに釧路根室観光の拠点の一つとして利用される。

敷地はオホーツク海沖に北方四島を望む根室市の高台にあり自然環境は厳しく冬期はオホーツク海から強い風雪が吹き、夏季は100日以上も海霧が発生し陽が当たらない状況にある。

しかしこの建物は「自然環境の活用」をテーマに計画され、敷地の中にわずかに生き残る樹林も、その保護育成を優先した施設配置計画から生み出した空間を「人と人」、「人と自然」のふれあいの場として活用している。さらに緩やかなスロープを含むサーキュレーションの空間を、新たに開発した高気密、高断熱木製サッシュウのガラスで構築することで冬期の長い日照時間を活用した蓄熱空間を生み出し、陽当たりの少ない夏季の自然通風路として生かすことで厳しい気象条件に耐える外断熱型省エネルギー建築を実現している。



配置図



北海道立 埋蔵文化財センター



所在地 — 江別市西野幌685-1

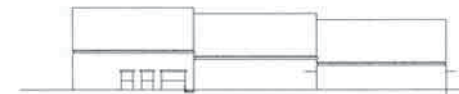
構造・規模 — RC造2階建 5,053.58m²

完成年月日 — 平成11年12月10日

基本設計 — (株)ハウ計画設計

実施設計 — ハウ・総合設備 JV

外構実施設計 — チカラ総合設計(株)



設計の考え方

■埋蔵文化センターの基本方針

- 1-地形・環境に素直で謙虚な建築
- 2-市民や子供達に親しまれ埋蔵文化財に対する興味を増幅させる建築空間
- 3-増大する収蔵量にできるだけ対応可能な建築

現況地形をできるだけ残し機能別に構成された3つのブロックを等高線に合わせて平行な配置を行っている。

丘陵や樹木の緩やかなカーブをモチーフに平面的にも立面的にも雁行させて稜線の繰り返しを形態化し、また、各所要室への主要動線となるホールは溪畔林沿のうねりを受けた平面としている。

内外装材は埋蔵文化を象徴する北海道産レンガと温かみのある木材を使用し、環境づくりとして建物の高さは周辺溪畔林の樹木のバランスに合わせて建物高さを設定し、屋根の一部には屋上緑化を行い自然との一体化を計っている。

整理作業場はセンターの一部としての機能を充足させ、形態的な整合性をとるためセンターと同質のレンガタイルを使い、かつ、整理作業場としての単一用途に適した専用率の高い平面計画としている。



北海道立青年の家

所在地 — 深川市音江町2丁目7-1

構造・規模 — RC造2階建 7,130m²

完成年月日 — 平成12年12月20日

基本設計 — ブンク・ハウ JV

建築実施設計 — ブンク・ハウ・R&K JV

設備実施設計 — 岡ハス・西村 JV

外構実施設計 — 和光技研(株)

設計の考え方

■背景

深川市の郊外、道央自動車道IC脇に位置している。宿泊人数200人規模の既存建物の改築である。

■地形を生かした配置計画

大規模な敷地造成を避け、緩斜面の地形を生かした配置を行った。遠景からは、多くの施設群が重なりあって集落をつくっているように見える設計とした。

■印象に残る空間デザイン

研修棟と宿泊棟に囲まれた中庭は、周辺から隔絶された空間として、親密な印象を与えるよう設計した。また、宿泊棟と研修棟を貫くエントランスホールはガラスの箱でつくられた大空間とした。

